論文の内容の要旨

論文題目　ポルトガルの建築における修復・改修デザインに関する研究
—ポウサーダに見る再生手法と理念—

氏名　　宮部浩幸

1 章　序　-研究の背景、目的、対象、方法-

持続可能な環境を模索することが大きな目的になった今日において、日本でも古い建築の再活用が、その手段の一つとしてますます重要性を帯びている。

一方、ユーラシア大陸西端のポルトガルでも他の西欧諸国と同様に古い建築物の再利用は日常茶飯事で、歴史的建造物も積極的に活用されている。歴史的建造物の活用例の中でも先駆的役割を果たし、同時に独自のデザインを展開しているのが一連のポウサーダである。

それらのなかには歴史的建造物と現代建築の独自の融合形態を作り出しているものがある。その独自性が新旧の調和的ないし対比的統合を目指す今日の改修デザインの理念や手法を拡大し、豊かにすると考えられる。

ポウサーダはもともと国営のホテルで、観光業に力を入れる政府の命で 1938 年に始まった一連の計画である。1948 年からはポルトガルではあまり例のなかった歴史的建造物の積極的な活用に乗り出した。ポルトガルにおいて歴史的建造物に現代建築を増築することに先鞭をつけたのもポウサーダである。これらはポウサーダ・イストリカあるいはポウサーダ・デザイン・イストリコと呼ばれ、現在に至るまで 20 が実現され、今も新しい計画が進行中である。

これらはポルトガルにおける歴史的建造物の再活用や修復・改修・増築を語る上で頻繁に引用される事例を複数含んでいる。それにも関わらず、ポウサーダを一連のものとして取り上げ、その改修デザインの理念や手法の研究はまだ行われていない。

一方、ポルトガルの修復・改修の歴史に関する既往の研究では、修復・改修で「新旧」がどのように関係づけられているかということを、建築に用いられている様式や表現といった見た目、つまり「視覚的現象」に基づいて説明している。

ここで言う「新旧」とは、既存の状態が「旧」で、それに応答して加えられた（あるいは削られた）デザインが「新」である。建築の設計が既往のコンテクストへの応答を重要視していることと同様に、コンテクストに既存建物がある修復・改修においても「新旧」の扱いが重要である。

一方で視覚的現象に現れにくい平面形式とその変遷については触れられていない。設計においては重要な位置を占める平面形式と視覚的現象の関係はよくわからないままである。

以上の状況を踏まえ、本論の目的は以下のようなものとする。

1. 全 20 のポウサーダに見られる修復・改修の事例を視覚的現象に基づいて分類、整理し、特徴的な手法の有無を検証すること。
2. 上記の変遷で見られた手法を、ポルトガルにおける修復・改修の歴史の中で位置づけを明らかに

すること。

3. 修復・改修で変容する平面形式の型の有無やその有様を明らかにすること。

4. 視覚的現象と平面形式の関係を明らかにすること。

5. 再生デザインの枠組みでポウサーダのデザインの独自性を評価すること。

研究の対象は歴史的建造物を転用したすべてのポウサーダとする。これらは 1950 年から 2006 年の間にポウサーダに転用されたもので、延べ 20 事例となる。筆者はすべての事例を訪れ、空間を体験し、写真撮影を行った。また、散在する文献を集め目録を作成した。

分析に先立ち、注目すべき点を明確にするため、文献をもとにポルトガルにおける修復・改修の歴史を概観する。

分析は平面形式の分析と視覚的現象の分析と両者の比較、考察からなる。

平面形式の分析では修復・改修で変容する平面形式に型が有るのかを確認し、その特徴を明らかにする。そのために、文献、図面、写真資料をもとに同スケールで作成した、各事例の過去から現在に至るまでの平面配置図を時系列に並べたものを用いる。

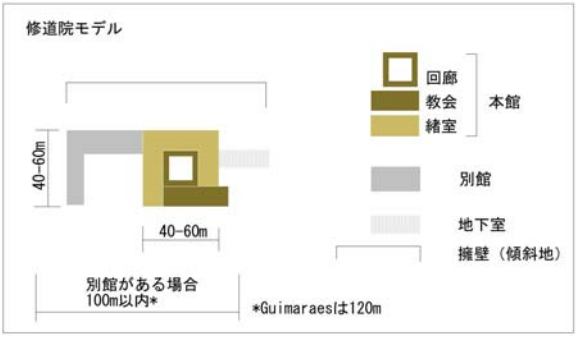
視覚的現象の分析では修復・改修の事例を分類、考察するため、写真と説明図を用いて、修復・改修によって生じる建築各部の新旧を区別する視覚的現象を記述する。

2 章　ポルトガルにおける歴史的建造物の修復と改修の歴史の概観と分析の視点の抽出

歴史的建造物の修復と改修の歴史は「想像に任せた修復」から「新旧を区別する改修」への系譜であった。19 世紀以来、新旧を同化する、区別するということが、改修のデザインにおいて重要な課題であったことが分かった。研究対象とした事例の多くが属している 80 年代以降、修復のデザインは「想像に任せた修復」と「新旧を区別する改修」の間を揺れ動いていた。そして、その時期にできたものには概観しただけではどちらとも判断できない事例が見いだせる。両者の間で独特な手法が生まれている可能性がある。このことから、本論の着目すべき点が「想像に任せた修復」と「新旧を区別する改修」の狭間であると考えた。

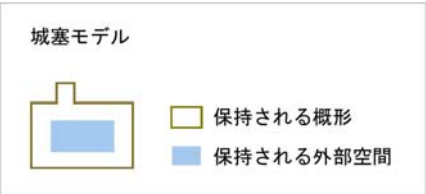
3 章　事例紹介と平面形式の変容過程

各事例の過去から現在に至るまでの平面配置図を時系列に並べ、その変容過程を検証した。平面形式には建築が成長するにつれ、収斂して行く型が見られた。型はホテル以前のもとの用途によって異なり、修道院を起源とする事例は「修道院モデル」、城を起源とする事例は「城塞モデル」に収斂していた。



修道院モデルは中庭を持った本館とその周縁から外へ延びる別館という組み合わせに着目することで見いだせる型で、別館がある程度までの成長を保証している。

城塞モデルは変わらない外形と外部空間に着目すると見えてくる型で、堅牢な外壁や城壁による保持される概形と広場や中庭といった保持される外部空間がある。成長には消極的で地下や目立たない外部空間に増築が施される。

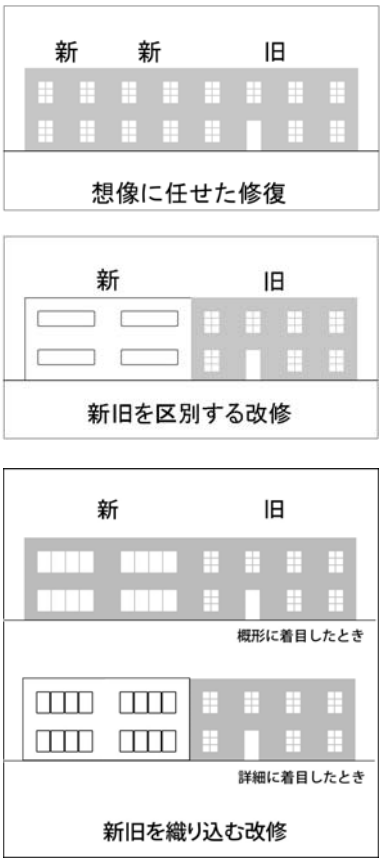


そして、一端、型に到達すると機能の変更に関係なく平面

形式はほとんど変化しない傾向があった。この傾向は 17 世紀から 21 世紀の現在に至るまで見られる普遍性の高いものであった。

4 章　視覚的現象の分析

新旧を区分する視覚的現象を記述し、分析を行った。「想像に任せた修復」は視覚的に得られる新旧区分が実際と一致しない（右図上段）、「新旧を区別する改修」は視覚的に得られる新旧区分が実際と一致するもの（右図中段、白色が新、グレーが旧に見えるところ）として説明できた。



2 つの分類に当てはまらない事例の視覚的現象は概形をとらえたとは実際の新旧区分と一致せず、詳細に着目したときには実際と一致する性質がみられた。その視覚的現象では、真実を含む複数の新旧区分が生成していた。視覚像に含意として織り込まれたいくつかの新旧区分が詳細な観察や記憶によって導かれ開示される。これを 3 つめの種類の修復・改修として、これを「新旧を織り込む改修」と呼ぶこととした。

歴史的な背景に照らしてみると、「新旧を織り込む改修」は「想像に任せた修復」とそのアンチテーゼである「新旧を区別する改修」の葛藤の果てに創造されたと考えることができた。また、この手法の視覚的現象を詳細に見ると「概形に同化、細部に区別」を仕込み、新旧区分の認識を遅らせる特徴が見られた。

新旧区分を判断する際には視覚像に加え記憶が作用していた。この記憶を召喚するものには、記憶にあるものと類似したものと、差異を示すものがあった。差異を示すものは「新旧を織り込む改修」に多く見られ、記憶にあるものと眼前のものの差異が顕在化するにつれ新旧区分が生成していた。

視覚的現象を記述して行くと、目の前のものについて新旧を示すだけでなく、かつてあったものの不在を暗示する事例も見られた。

5 章　終章　-平面形式と視覚的現象の比較-　-結論-

平面形式と視覚的現象の比較を行った。平面形式、視覚的現象ともに、過去に生成した型や手法の性質を保持しながら、新しい条件に対応して行く共通性が見られた。

本論はポウサーダの修復・改修を研究し、「想像に任せた修復」、「新旧を区別する改修」に加えて、「新旧を織り込む改修」の手法の一端を明らかにすることができた。また、それの歴史的、文化的背景の中での位置付けも確認できた。以下に本論で確認された事柄の中でも特に重要と思われる 5 つを列挙する。

1. 「新旧を織り込む改修」の視覚的現象では、視覚的に取り出せるまとまりに新旧の判断を促す因子が重なり新旧区分が見いだされる関係が複数有り、その中に真実の新旧区分と一致するものが含まれていること。

2.「新旧を織り込む改修」が「想像に任せた修復」と「新旧を区別する修復」の葛藤の果てに創造されたこと
3.「新旧を織り込む改修」の事例の中に「概形に同化、細部に区別」を作り、新旧区分の認識を遅らせるデザイン手法を確認したこと
4. 機能や意匠の変更に関係なく一度収斂すると変わらない平面形式の型があること
5. 平面形式、視覚的現象ともに、過去に生成した型や手法の性質を保持しながら、新しい条件に対応して行く共通性が見られたこと

これらを考察すると「新旧を織り込む改修」は、ポルトガルが手本とした 19 世紀、20 世紀のフランス、イタリアの手法や現在主流となっている新旧の関係を調和ないしは対比から二者択一的に選択する方法と比べた場合、それらとは異なる独自な手法であると当時に、建築デザインの一般則になりうる可能性を見いだせた。

「新旧を織り込む改修」は近隣諸国よりも「想像に任せた修復」が浸透し「新旧を区別する改修」の導入が遅れた独特な歴史と「保守性」と「発展性」が均衡しながら新しい可能性を探り出す伝統を背景にポウサーダの改修デザインに結実した手法であった。

そして、「新旧を織り込む改修」は新旧の区分について「一瞥」と「凝視」で異なる認識を持たせることで成立していた。「一瞥」と「凝視」の認識がもつ意味のずらし方、重ね方で様々なデザインが展開できることを示していた。

ポウサーダの改修デザインに見られた「新旧を織り込む改修」は新旧の調和的あるいは対比的統合を二者択一的に目指す今日の改修デザインの理念や手法を拡大し新たな選択肢を与えると考えられる。